F児の育ちと母親支援の考察

――障害児デイサービスの一事例より――

和　田　幸　子

1．はじめに

問題意識：障害児保育における母親支援について

本稿では筆者が勤務した障害児デイサービスでの事例を取り上げる。

当所での保育は，障害があると診断，判定された子どもを対象とすることが前提となっている。それゆえ当所に通いはじめる子どもは，正常な発達との差異が明らかであると診断された2～3才であることが多い。

Fと出会ったのはもっと幼い時だった。新年度を迎えてしばらく経った春の日に，生後11ヶ月のFは母親の抱っこバンドの中に入れて連れられて来た。この時からFとの慎重な関わりが始まったのだが，次第に違和感を覚えるようになってきた。それは，Fの姿勢を支えて抱く時，保育者の体に添わないように感じたからであり，またよだれや涙で汚れていない素肌が他者からの接触を拒んでいるように感じたからであった。以後約2年間は，Fの障害が明らかになってくる過程であった。まだ乳児期だから変わりうる，とFの状態に向き合うことを先延ばしにすることもできたであろう。しかし，状態の深刻さが真正面から迫ってもきたのだった。筆者らはその事実を受け止め難く，なおもFに願いを向け関わり続けようとする時，葛藤した。Fの思いを読み取り理解しようと努め，Fの育ちを具体的に願い，手だてを考えて試みるものの，望んだ変容が見られず，Fの育ちを支えるべく手だてを行い続けることに難しさを感じたからであった。焦りを感じ，無力さにうろたえた。そしてまるで幼いFが障害のある子になっていく過程を共にしているようで，心穏やかではなかった。(1)

では母親（以下Mとする）にとってはどうであったのだろうか。平穏でなかったことは推測できる。MがFと関わり，徐々に保育者にFを託していった過程では，Mの気持ちの変容があったはずである。田中は，保育者は子ど

もの育ちと保護者の思いの育ちに向き合うことができる日常の場所にいるゆえ，以下の3点を含む保育実践によって保護者への支援をすることができると述べる[(2)]。①子どもの育ちの事実を証明すること，②子どもを勇気付ける援助をすること，③保護者を励まし続けること，である。Fをめぐる保育実践が，Mにはどのようにうけとめられていたのだろうか。

保育士として障害児を受け持った経験を有する下平は，我が子の成長過程で感じた違和，不安をたどり，決心して診断を受けたこと，診断名がついたこと，そしてそこから障害の受容に至るまでを記述し，自らの保育士時代を振り返って保育場面における親支援への提言を行なっている[(3)]。その内容を記す。診断を受ける前の時期には望みを持っており，不安な気持ちの中にも安らぎがあったという。できるなら本当のことを知りたくない思いがあったにもかかわらず，我が子の良き理解者，良き母になろうと自らに言い聞かせるように，早く診断名が知りたいという言葉を発していたと振り返っている。診断の時には，これは生まれつきなのだと優しく励まされたが，育て方が悪かったと言われた方がどんなに気持ちが楽だったろう，母さえ変われば我が子が治ると言って欲しかった，と明かしている。その後我が子の味方になろうとして周りの人に対しても障害があることを説明していったのだが，逆に我が子に普通になってほしい，普通に見えるように振舞って欲しいという苛立ちの気持ちも持っていたという。このことから障害を認めることと受容することはまったく別のことだと述べている。そんな下平が，我が子を受け入れることのできる時を迎えた。我が子を受容できたというこの実感は突然にやってきた。その具体的なきっかけはよくわからないという。これらの記述を通し再度自らの保育士時代には，母親がどんな葛藤を抱えて過ごしているのかを考えたことがなかったことや，楽しんで子育てをするための支援ができなかったことから，下平は保育者へ2つの提言をしている。①親が最も苦しみ葛藤している時期に寄り添う存在であって欲しいこと，②子育ての喜び・楽しみを分かち合って欲しいこと，であり，このことによって親支援になると述べる。

他の事例研究との比較

下平は障害のある子の親の立場から，自らの保育士経験を振り返っている。保育者へ提言を行い，現保育者に親支援を託しているのである。

なぜ親支援が必要なのか。岩坂は，子どもへの継続的な支援の，その要となるのは親だとする。親と専門家が一緒に子どもに向き合っているかどうかが重

要になるからだという[4]。そのような事例として一門らによるおもちゃを介した療育場面での親支援のあり方の検討[5]，新川らによる障害児通園施設内での母親面談の内容・あり方の検討[6]があげられる。しかしこれらからは下平の言う，最も苦しみ葛藤している親の姿は見えてこないし，子どもが何かができるようになることによって子育ての楽しみは得られるのではあろうが，見た目よりもっと深く傷ついている親の気持ちに寄り添う支援のあり方を探る材料にはならないと考える。親が我が子を育てていく過程で次々と生じてくる不安をどのように消化していくのか，また保育者は子どもと関わりながら親の不安をどのように読み取っていくのか，が問われるべきだと考える。

本稿の目的

田中のあげた3つの視点，下平の2つの提言が，保育者の心がけるべきイメージに留まるだけであっては意味を成さないであろう。なぜなら保育者は，自らが直面している事例の中での親支援のあり方を，保育行為を行ないながら見出していかなければならないからである。また保育者は先行事例と照らし合わせることによって自ら直面している事例を深く読み解くことができる。そこで，具体的な事例と省察の出現が望まれる。

本稿では筆者ら保育者のFとの関わり，またMとの関わりを記す。約2年間の事例の中で，MがFの障害を受け止めていく過程で生じたことを記すことによって，保育者が為した役割を省察する。そのことによって，母親支援のあり方を問うことを目的とする。

2．女児Fと母親Mについて

生後11ヶ月時初来所した。Mは「Fです」と名乗り抱っこバンドからFを出し筆者らに向けた。Mはインテーク問診票の「子育てで気になることはありますか」の質問に，Fのからだが硬いように思う，と書いた。以後，母子で週1回通所することになり，2年目はF単独通所となった。並行して，育児相談のため小児科に，また身体機能訓練のためa園にも外来で通っていた。

3．方　法

保育記録とビデオ記録をもとに，約2年間のFの様子と保育者のFへの関わり，Mの様子を記述し，Mの変容を見出し考察する。その際，対象者の育ちが損なわれないよう，個人が特定されることのないように配慮した。

4．事　例

F通所日の保育について

Fが通所した曜日は，音楽遊びを主な活動としていた。その概要を表1に記す。

（表1）音楽遊びの概要

期間・頻度・時間・回数	場　所	参加者・スタッフ
X年5月～X＋2年3月 週1回1時間 全76回	当児童デイサービス 1階ホール	1，2，3才児（平均9人）とその親 保育者4人（I,T保育者，筆者，看護師）

Fが通所した日の，活動内容を表2に記す。

Fは1年目（X年度）は母子で昼食前まで過ごした。2年目（X＋1年度）4月後半より単独参加で午後過ぎまで過ごすようになった。

（表2）F通所日の活動内容

時間	活動内容	時間	活動内容
10：00	来所・自由遊び	11：50	昼食
10：30	音楽遊び		自由遊び
	（季節の歌・呼びかけ）	12：50	園庭遊び
：35	（ふれあい遊び）		散歩
：45	（手具を使った遊び）	14：00	帰りの支度
：55	（体を動かす遊び）		絵本を見る
11：05	（皆で一体感を感じる遊び）	14：30	お帰り
：25	（ミニシアター）		
：30	手洗い・お茶を飲む		
	昼食用意		

事例の経過と考察

保育中のエピソードを記し，Mの変容について考察していく。＃は来所回を表す。

【1年目】

〈エピソード1：Fに添おうとするM〉

＃1：X年5/14（11ヶ月）初来所。保育者がFを抱いて楽器遊びをしている他児達のところに連れて行った。Mは座ったまま見ていた。保育者はFを抱いて他児とも関わり，そしてMの元に戻した。

＃3：X年5/28 筆者は座位で膝の上にFをのせ，そのままの姿勢で前進した。Fはゆっくり顔を上げて筆者の顔を見た。ベソをかきそうになったので筆者はMの方へ向きなおして進んでいった。Mはその場に座ったまま両手を軽く広げて「Fちゃんおいで」と声をかけた。筆者はMの所まで前進し，FをMの手に渡した。

FはMに抱かれて一体化しているように見えた。そんなFを保育者は慎重に抱いた。FはMと離れたということに気づいていたであろうか。筆者の膝の上にいたFは，Mとは異なる抱かれ心地に違和感を覚えてベソをかきそうになったと思われる。その様子をMは座って見ていた。保育者に託しているというよりは，Mの手元から離れたFを見ている，という印象だった。MはFに声をかけた。MはFを迎えようとしたのだが，Fがどのように感じているのかわかりにくかったのではないだろうか。Mが座ったままであったことに，Fがそこにいる Mをはっきりと認識しておらず，Mを求めていないのではという不安，寂しさを，筆者は見出す。そこで筆者はFとMをつなぐべく，FをMのもとまで連れて行ったのだった。

以後保育者は，関わりに対してのFの反応を感じにくいこと，また身体が硬いことから，Fの障害の深刻さに気づいてきた。保育者間では，Fの気持ちが動き，Fが感情を表現できるような関わりをしたい，肌を触ってあげるようにして過敏さをやわらげたいと話し合っていた。

〈エピソード2：黙って見ているM〉

＃15：9/24～＃20：11/5（1才4ヶ月～1才6ヶ月）看護師は積極的に関わりを続けた。それに対してFは激しく泣いたのだが，Mは座って黙ったまま見ていた。筆者はFに「おいで」と声をかけて抱き上げ他児達の遊びの輪の中に連れて行った。

この頃Mは小児科やａ園でFの診断結果を聞いたり，他の検査を受けるための手続きを取っていた。

看護師はFの障害の重さに気づき，今できる関わりをしようと懸命になっていた。具体的には座位を支えることと，手足の緊張をやわらげることであった。重力を利用したりマッサージする方法であったのだが，Fは激しく泣き，Mは黙って見ていることが続いた。筆者らは何度も話し合いを重ねたのであるが，実際の保育の場面では，激しく泣き続けるFの姿が痛ましく，抱き上げて慰める，という展開になっていた。

この頃Mは小児科，a園で進められる診察に対応することに心を砕いていた。筆者は報告を受けるたびに，納得しておらず不安の中を過ごしているMの心中を察した。Mをめぐるスタッフによっての処置が進められ，Mにすれば受け身的に進んでいく状況に居るしかなかったのだろう。Mの意思で主体的に診察・検査を進めようとしているのではないのである。激しく泣くFを見ながらも何か働きかけをするわけでもなく黙って見ていたMの姿より，筆者はMが主体的に子育てをできない時期に陥っていることに気づいた。

筆者ら保育者は，話し合いを重ねた。保育の場面でFに必要と考えることは何かと瞬時ごとに判断しながら保育行為にしていく必要があった。この時は看護師の元で少しの挑戦をしたFを抱いて迎えるようにした。

〈エピソード3：Fに関わるM〉

＃21：11/12（1才6ヶ月）太鼓のリズムに合わせて，Fの両手を動かし，徐々に大胆にしてみるなど，MからFへの関わりが見られた。その後MはFを抱いて他児達のところへ行くようになった。

Mより，脳波検査の結果，異常はなかったとの報告を受けた。

この頃，両脇を支えて立位にしてあげると，Fは少しの間両足を伸ばし足裏を床につけて立位を保つようになった。

音楽遊びをする皆の輪の中で，MがFにもしてあげられそうな方法で参加するようになってきた。これは，通所を開始してから約半年間，Fの状態への不安を抱えながらも通い続け，Mがこの保育の場に居たことと無縁ではないと考える。Fにしてあげる，という行為は，これまでの保育者や他児の母親の子どもへの関わりをモデルとして引きだされたのかもしれない。このようにMの動きが生じてきた背景には，脳波の異常はなかったという結果を一つの安心材料としたことがあると考える。立位を保つなど，保育者の関わりに対してのFの反応が前向きな成長であると受け止められる状態であったことも重

要である。

〈エピソード４：理解しづらさを打ち明ける M〉

＃37：X＋１年4/15（１才11ヶ月）床に座ったＦは，声を出しながら足を交互に動かしお尻を支点にしてその場でくるくる回った。保育者が側に行くと両手を少し挙げて抱っこを求めた。その様子を見ていたＭは「Ｍが間近だとＦは目をそらす，なのに側にはいてほしい様子です」と話した。また「Ｆは自分のことをどう思ってるんやろう，お兄ちゃんの時はそんなこと思えへんかったけど」とも話した。
＃39：X＋１年5/13（２才）Ｆはすぐ側にいる筆者に何かを要求するように「あーあー」と声を出した。筆者はＦの両脇を支えようとした。Ｆは足先を床につけ，ぐいっと勢いをつけて膝を伸ばした。Ｆの立とうとする意思が感じられた時だった。
立位でつないだ手を左右交互に上げ下ろししてみた。Ｆは立った姿勢で手を動かしてもらってにんまりと笑った。
この後，Ｆは単独参加になった。

Ｆは安定して過ごせる様になってきたと共に，動きが出てきた。座位でくるくる回る動きは，他児らがにぎやかにしている場面でよく見られた姿であった。抱っこや立位にしてほしいというような要求を出し，保育者がそれを読み取ることができるようになってきたのもこの頃である。

Ｆは以前に比べると動きが多くなり，動かせる部分を存分に使って表現するようになった。Ｍはそのようなの身体感覚への想像をした。Ｆが自己をどのように捉えているのかと考えていたのである。それは「自分のことをどう思ってるんやろう」というＭの言葉に表れている。また目をそらしているＦの様子から，Ｆが人や物をどのように見ているのかについても，想像したいと考えていた。これまでＭは，Ｆが幼いゆえに密着した状態で，一心同体のように感じていたのだろう。しかし今動きが盛んになり喜びの表現をするようになったＦのありようをＭは理解しづらいと感じていた。Ｍは，Ｆと保育者の関わりを見てどのように感じたのだろうか。親以外の他者との関わりを喜ぶ気持ちと，Ｆを理解したいという気持ちを持ちながら理解しきれない寂しさ，その両者をめぐっていたと考えられる。

筆者と向かい合い両手をつないで立位を保っているＦは，顔色よく，ふっくらとして頼もしい顔つきになっていた。当所で最も幼いＦは，Ｆなりに順調に過ごしつつあった。その様子からＭはＦ単独参加にしようという決心をした。

【2年目】

単独参加になり，保育者はFとの関わりに戸惑うことが生じてきた。筆者ら保育者は迎えにきたMにFの様子を伝え，Mの考えを聞いては保育場面での関わり方を考え直してきた。以下，食事場面(①)，おんぶについて(②)のエピソードを記す。

〈エピソード5：Mの解釈を聞いたこと〉

①＃44：X＋1年6月24日（2才1ヶ月）Fは昼食時に大泣きすることが続いていた。保育者が抱いて立つと泣き止む。Mに伝えると，Fは下半身に触れるのがいやなので座って抱っこされることを嫌い，立って抱っこしてほしいと訴えるようだ，との答えが返ってきた。また食事については，好き嫌いなく食欲旺盛だとも話した。

この後，立ってFを抱き，その姿勢で食事を進めることになってしまい，保育者は疲弊した。椅子に座ることと，Fが自分の手でつまんで口に運び食べるようになってほしいと願い関わり続けた。

＃56：X＋1年10月7日（2才5ヶ月）Fが手を使って食べるようになっていることをMに報告した。Mは驚いていた。

Mを離れ単独参加になったFと一緒に食事を摂ることになったのだが，次第にスムーズに進められなくなってきた。大泣きして混乱に陥ってしまうのだが，泣き出す理由がわからなかった。保育者はFを安心させようとして抱くのだが，その抱き方に対しても何かを訴えるかのように泣き叫んだ。抱いて立つと泣き止むことに気づいた保育者は，片手でFを抱き上げ，もう一方の手で握ったスプーンにご飯をのせてFの口に運ぶ，という関わりをすることになってしまった。さらに，もっと食べたい，早く食べたいと訴えるように泣き叫ぶFに応えようとして，保育者は心身消耗状態に陥りそうになった。

Mの解釈を聞いた保育者は，Fが下半身で過敏に感じて混乱してしまう前に，自らの手を動かして食べることができるような方法を探る必要があると気づいた。忍耐の要る関わりが続いた。ようやくFは少しずつ食器に自らの手を伸ばしてはご飯を口に運ぶようになった。保育者はその姿に喜んだ。

一方，家ではMが次々に口に運び，Fは飲み込むという相互の関係が続いてしまっていた。簡単には動かしようのない関係に陥っていることにMは気づいた。Mの驚きはそのことを表しているのだろう。

②＃57：X＋1年10月14日（2才5ヶ月）Fをおんぶするのが困難なことに筆者は気づいた。Mに様子を聞くと，「赤ちゃんのときはずっと泣いている子だったのでおんぶひもでおんぶして家事をしていた」「おんぶしていると寝た」「今おんぶは全くしていない」「Fはおんぶされることがへた」とのことだった。
そこで保育者は，Fをおんぶする時を必ずつくろうと話し合った。

筆者ら保育者は，Fに出会ってから1年半，悩み，話し合い，心尽くして関わってきたつもりである。しかし，おんぶができないということにこのときはじめて気がついたのだった。Mの話によると，おんぶはするものの，Fの方から身を任せるようなしがみつき方ではないということが察せられた。

身体の硬さ，皮膚感覚の過敏ゆえに，Fは他者の背中に負ぶさる経験を経ずにいたのだった。おんぶをしないことによって，Fは重要な経験をせずに過ぎていくのではないか。何より考えさせられたのは，Fが保育者の背中に身を任せられないでいることである。Fは保育者を信頼していないのだろうか。このことこそがFの生き辛さではないか。これが障害の重さということなのか。この現実を突きつけられ，どのように気持ちを整理したらよいか迷った。今後は変わっていくのだろうか。保育者は話し合った。這うことをまだしないFに，保育者の背中に覆いかぶさる経験をしてほしいと話し合った。腰を曲げた保育者の背中の上に覆いかぶさることによって，這うときの体位，つまり水平に近い姿勢を経験できるのではと考えたのだった。そこで保育者は身を屈め，Fを背負うことをはじめた。保育者の背中で棒のように突っ立っているFを，落とさないように後手で支え背負った。今できることをして関わりたい。そのような気持ちでおんぶをしていこうと決めた。

食事，おんぶの場面でFとの関わりに戸惑った時，保育者は，Mにどのように考えるか尋ね，Mの解釈を聞いた。そのことによって保育者は再び考え直して，別の関わり方を考えては試み，再びMに伝えては考える，ということを繰り返していった。

〈エピソード6：進路についての悩み〉

＃X＋1年11月（2才6ヶ月）：当所の利用2年目であること，春にはFは3才になることから，より大きな保育集団に進むことを提案してきた。保育所の申し込み時期を迎えMと話を重ねた。しかし，Mは子ども同士の関わりによるFの成長を期待したいと理解はしているものの，Fがどのように保育所で過ごすことができる

のか考えにくいと話した。歩けるようになるまではａ園の訓練と並行して当所の利用を続けたいと言った。

〈エピソード７：診断の時〉

＃X＋２年1/19（２才８ヶ月）：筆者はａ園でのＦの身体機能訓練に同行した。道中Ｍは，Ｆの診断名をはっきりとさせるべく検査を受けようか迷っていると筆者に話した。筆者は「それをはっきりさせた方がお母さんとしてはいいのですか」と尋ねた。Ｍはしばらく考え，成長期に出てくる問題に対処してあげられるかも，と応えた。

その１週間後，Ｍはきっぱりと「受けるの，やめます」と言った。そう，と応えた筆者にＭは「そう思うから，それでいいから，検査はしません」と言った。

この頃，Ｍは地域の家庭児童相談室に行き，保育所入所の相談をしている。

これまでもＦは色々な検査を受けてきた。今回は，より精密な検査をしようかと考えていた。この結果が出れば，診断名がはっきりすることになるかもしれない。無自覚に進めないほうがよいだろうと考えた筆者は，Ｍに問いかけをしたのだが，その応えはＭの思いではないように感じられた。しかし１週間後，検査を受けないと言い切ったＭは，立ち位置を決めていた。それは，診断名がついたら何かが変わるわけでもなく，ただＦをしっかり育てていく，とＭが決意した時であったと筆者は受け止めた。同時にＭは，障害にかかわらず生活している地域で他者と共々に生きていくことが自然なことだとも感じはじめていた。それは地域の家庭児童相談室に行ったこと，また保育所への進路を考え始めたことに表れている。

〈エピソード８：Ｍの危機と保育者のゆらぎ〉

＃71：X＋２年2/10（２才９ヶ月）Ｍは，夜寝られず生活リズムが乱れてしまっているというＦをバギーに乗せて来所した。Ｍは疲れ切った様子で保育室に腰を下ろした。

生気ないＦは保育者にすり寄った。抱くと，手首，足首を突っ張らせ身を硬くし，舌をねじらせて泣いた。声にならず，さらに身をよじらせた。Ｔ保育者は「泣いたらあかん」とＦを抱き他児達の遊びの場へ連れて行った。これ以上ＭにＦの泣く姿を見せたくなかったからだった。この時，タイミング悪く他児達にトラブルが生じてしまったので，Ｉ保育者はＦを守るべくおんぶひもでＦを背負った。Ｔ保育者と筆者はトラブルに対応した。

Mは S 児の母親と話し出し，午前中は保育室にいた。昼に M と S 児の母親は外へ出て食事に行った。

保育室の食卓では，うつろな目の F は 1 人で座位を保てずにいた。保育者は後から支え，スプーンで口に運んで食事を進めようとした。F が顔を上げ一口飲み込んで食べることができた時，保育者はほっとした。F の生気が少し戻った。食事が終わると手を少し挙げて筆者の方を向いたので，抱いてやり，手足，背中に手を当て，ゆっくりさすった。F はそのままの姿勢で眠った。45分後，目を覚ました。

外食から戻った M に，F が昼食を摂った事を伝えると，M は「私も温かいごはんを食べてきました」と赤らんだ顔で応えた。F をのせたバギーを押して帰る M を見送る間，保育者は言葉が出なかった。

生活リズムの乱れに始まった F の混乱は M を苦しめた。F の泣き声は M をますます追い詰めた。F を育てていくことの苦労が正面から迫り，今後の見通しが見出せなくなったのだろう。このような逃れることのできない事態は M にとってはじめてのことだったと考えられる。

この日保育者は張り詰めた緊張の中，F と M を迎えた。F は座位を保てないほどふらつき，突っ張らせ，よじらせた体は，驚くほど小さく見えた。M は青白い顔で腰を下ろしたものの，F のかすれた泣き声が聞こえるたびに目を潤ませた。そこで T 保育者は，M に F の泣き声を聞かせてはならない，と懸命に F と関わった。他児達のトラブルの中，I 保育者がおんぶひもで F をおぶった時，F を守らなければという I 保育者の意思が伝わってきた。実際，F, M の危機を前に，保育者はうろたえたのだが避けることはできないと，それぞれが懸命に関わったのだった。この日保育者は，大きくゆらぐ気持ちをとどめて，F,M の危機に向かい合ったといえる。やっと身をゆだねてくれた F の目覚めを待ち，帰る F,M を見送りながら，それぞれの保育者は少しずつ平静に戻っていくのを感じていた。だからこそ言葉が出てこなかったのだった。

〈エピソード 9 ：保育所入所への決断〉

＃75：X＋ 2 年3/10（ 2 才10ヶ月）M より， 4 月から保育所へ行くことになった，と報告を受けた。

保育所申請時には踏み切れなかったのだが，年度末に入所のチャンスがやってきた。M が不安の理由にあげていた歩行について，まだ明るい見通しがな

い状況であるにもかかわらず，MはFを保育所に進ませる決断をした。筆者らは道が開かれたことを喜んだ。

5．考　察

当所の音楽遊びは，子ども達一人ひとりが表現できることと，皆が一体感を持てるようにと望み，子ども達の様子に添って緩やかに進むように志向して行なわれていた。幼いFを迎えた保育者は，先導することなくFに添おうとするMを見取ることに努めた（エピソード1）。発達のための具体的な支援，関わりを拒むFの様子や，他所で進められる検査，診断をMなりに解釈するには時間が必要だったのだろう（エピソード2）。その間保育者はFを抱いて関わり続けたのだが（エピソード3），保育者の関わりにFが少しずつ応えるようになることはMの喜びとなった一方，Mには理解しづらさ，寂しさを募らせることにもなった（エピソード4）。2年目に入り単独参加になったFとの関わりは困難なことが続いた。そこで保育者は感じる悩みや迷いをMに伝え，Mの解釈を聞いた（エピソード5）。それはMがFに望む願いであることもあった。進路を考える時期には保育者がMに問いかけをし（エピソード6），検査を受ける意図をあらためて問うたことに対して，よく考えた後，Mは自分がFの母親でありしっかりと育てていくのだから，診断名はいらない，と主体的な姿勢を示した（エピソード7）。F,Mの危機的な状況の時には，保育者は平常心を保つことが難しくなったがゆらぐ気持ちを一旦とどめ，懸命にFに向き合った（エピソード8）。そのような保育者にしばらくFを託すことによってMは危機から脱することができた。このことを通して，Mは今後Fをめぐる人たちとの関わり合いを期待し，地域での生活の基礎を作るべく，保育所へと進む決意をした（エピソード9）。

本稿で記してきたエピソードには，Mの感情の動揺，迷い，葛藤が見られる。それは振り幅をもつゆらぎであり，あたかも左右にゆらいでは次第に在り処を定めていくようであった。重要なことは，保育者にとってもこのようなゆらぎはあり，避けることのできない経験だったことである。エピソード5では保育者が迷い，Mに解釈を尋ねた。Mも困難は感じているのだが，この時はゆらぐ保育者に解釈を伝えることができた。比して，エピソード8では状況が異なる。ゆらぎの振り幅が大きくMにとってはまさに立ち位置を失いそうな危機であった。保育者もたじろいだのだが，F,Mの危機的な状況を前にして，Fを守り，Mのゆらぎを受け止めるべく，保育者は自らのゆらぎをとどめた

のだった。

尾崎新は，社会福祉実践において「ゆらぎ」の経験が原点となると捉えている。当事者はいかに生きるか，どう歩むべきかが見えにくい体験を生きており，後悔と期待の間の葛藤，挫折感に支配されることもあるゆえ，「ゆらぎ」を経験しているというのである。また援助者は，人の生活の仕方や生き方に常に正しい画一的な答えが存在しないために「ゆらぎ」を経験するとも言う[(7)]。本事例中のMもすこしずつのゆらぎを経験し，そのたびに考えを新たにした。それはMがFと生きる意味を見出していく過程であったと考えられる。そして，エピソード8のように耐えづらさを経験する時，多方向に，大きな振り幅でゆらいだのであったが，Mはこの困難から逃げることができないことを知っていった。

この間，保育者はFを守ることに努めた。母親というのは初めから母親であるのではなく，子どもと関わる中でゆらぎを経験しながら，その子の母親としての在り方を定めていく。これが母親になるということであろう。本事例の2年間は，保育者がFと関わり続けようと努める中で，MがFの母親になっていった過程であったといえる。ゆらぎながらFの母親になってきたMは頼もしく見える。MはFとの生き方を選び取ってきたからである。進路の決まったFと，これからおきてくる何事にも柔軟に対応していこうとする気構えを身につけたMを見送り，保育者はF, Mに向けての役割にひとまず区切りをつけたのだった。

本事例の母親支援において，保育者が為した役割を以下にあげる。一つには，Fに願いを持ち関わり続けること，二つにはMのゆらぎに添うということ，三つにはMの決断を受け止めるということ，四つ目として次の進路へ送り出すことであった。保育者は子どもの存在の充実を目指して保育実践を続ける。その中で，子どもの育ちと捉えられることに共感し，さらに保育実践を続ける。一方子どもの育ちが感じられないと迷うこともある。迷いながらも子どもの今の状態に意味を見出そうと願いながら関わり続ける。本事例では，MはFをめぐる人々の共感と葛藤の過程を共にすることによって子育ての励みを得ていったのではないだろうか。

〈引用参考文献〉

(1) 拙稿「F児の育ちを支える保育の考察―障害児デイサービスの事例から―」『龍谷大学論集』第480号2012. pp. 67-83において，F児のつかむこと，食べる

こと，立つことをめぐる関わりについて記した。
(2) 田中康雄「障害児保育を医療の観点から考える」鯨岡峻編『障害児保育』2009．ミネルヴァ書房．pp. 47-73
(3) 下平正恵「幼児教育・保育現場における発達障害児の親支援への提言～発達障害児を持つ一母親としての観点から～」『文化女子大学長野専門学校研究紀要』1巻2009．pp. 41-48
(4) 岩坂英巳「発達障害児の親支援で大切なこと」『そだちと臨床』12号．2012．pp. 102-105
(5) 一門惠子・河田将一「発達障害幼児の療育場面における母親支援の在り方について」『紀要 Visio：research reports』27巻．2000．pp. 131-138
(6) 新川泰弘・吉弘淳一・安田誠人・辻朋子「障害児通園施設における母親支援に関する研究(1)」『滋賀文化短期大学研究紀要』13巻．2003．pp. 107-114
(7) 尾崎新『「ゆらぐ」ことのできる力―ゆらぎと社会福祉実践』1999．pp. vi-vii

キーワード 障害児保育の実践　母親支援　葛藤